

1年次から学校設定科目や対話で 関心を掘り起こし、表現力も育む

東京都・私立トキワ松学園中学校高校

自分の関心を突き詰め、自分の考えを表現する力を鍛える学校設定科目「思考と表現」を1年次に実施。関心の喚起につながる対話や、生徒を学校外と「結ぶ」ことを通じて、生徒の「マイ・ストーリー」づくりを支える。

年内入試の 現状

探究学習を頑張った生徒ほど 年内入試を希望

中高一貫の女子校である東京都・私立トキワ松学園中学校高校は、2014年度から「探究女子」をキャッチフレーズに、自ら探究学習を進められる生徒の育成に力を入れている。同校では以前から、各教科の授業において、「自分の興味・関心を追究する」、「自ら調べて自分の考えを発表する」といった探究的な活動に取り組んできた。それをさらに充実させようと、16年度から中学1年次に、18年度から高校1年次に週1時間ずつ、学校設定科目「思考と表現」を設置。すべての学習の土台となる論理的思考力や表現力、調査スキルなどの指導を体系的に行っている。

加えて、日常的に教師が生徒に声をかけ、対話から素朴な疑問を引き出し、問いに結びつけるようにしたところ、生徒は課外活動で探究学習に熱心に取

り進むようになった。「稲わらを利用した新繊維の開発」「強振動と急激な水温変化が及ぼす金魚損傷の影響」といった研究や、子どもの国際交流の支援など、探究テーマは多岐にわたる。

探究学習の深まりに伴い、年内入試の希望者が増加。22年度の高校3年生の特進クラスでは、年内入試の受験者数がクラスの3分の2に上った。同クラスの担任を務めた進路指導部長の加藤美恵子先生は、次のように語る。

「探究学習で自分の疑問や好きなことを突き詰めていった結果、生徒は将来やりたいことを見だし、それがおのずと志望校選択に結びついていきました。そして、大学調べをする中で、志望校が年内入試を実施していることを知り、『自分の頑張りを生かして志望校に挑戦したい』、『探究学習の成果を大学に見てもらいたい』と、年内入試を希望する生徒が多く現れました」

加藤先生が前回高校3年生の担任を務めた7年前は、年内入試の受験者数はクラスの3分の1だった。年内入試を実施する大学数の増加の影響もあり、ここ数年、年内入試の受験者が増えていると、田村直宏校長は語る。

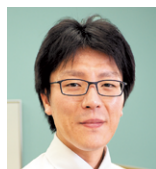
「大学が求める力と本校が培ってきた力が合致してきたことが、本校で年内入試の受験者が増えている要因の1



校長
田村直宏
たむら・なおひろ
同校に赴任して3年目。



進路指導部長
加藤美恵子
かとう・みえこ
同校に赴任して28年目。探究プロジェクト。国語科。



学力向上推進部
菅原孝宏
すがわら・たかひろ
同校に赴任して13年目。探究プロジェクト。2学年担任。理科(物理)。



「思考と表現」担当、司書教諭
勝見浩代
かつみ・ひろよ
同校に赴任して34年目。教務部。国語科。



「思考と表現」担当、司書教諭
小澤慶子
おさわ・けいこ
同校に赴任して23年目。広報部。社会科。

つだと考えています。探究学習での学びと成果を基にした「マイ・ストーリー」を表現することで、一般選抜では合格が難しい大学に合格した生徒は何人もいます。探究学習と年内入試への挑戦が、生徒の未来を大きく拓いています」

実践 1

高校1年次
学校設定科目
「思考と表現」

関心を広げ、深めながら
表現力を鍛える

高校1年次の「思考と表現」では、講読や文章表現、調査、論文作成、発表などのスキルを、実践課題を通じて学んでいく(図1)。例えば、1学期の後半に取り組む読書感想文では、ワークシート、下書き、清書と、1冊で3回のアウトプットを行う(図2)。授業を担当する司書教諭の勝見浩代先生と小澤慶子先生がその都度、誤字・脱字や表現の誤用などを添削。生徒の考えが伝わる文章になっていなければ、それも率直に指摘し、生徒が本当に伝えたいことを追究させている。

「本選びから主題に対する自分の考えに至るまで、生徒は自分の関心を突き詰めていきます。そうした過程を本科目で繰り返し経験することが、将来の目標や自分の軸を見いだすきっかけになっています」(小澤先生)

1年次の夏季休業時には、希望進路に関する新書を読み、レポートを書く進路学習の課題に取り組む。新書選びに迷う生徒には、司書教諭が伴走する。

「何に関心があるの?」「建築です」「造る方? 見る方?」などと生徒とやり取りしながら生徒の関心を探り、それに合いそうな本を数冊挙げます。そして、目次と最初の数ページを読んでもみて、1冊読み通せそうな本を選ぶよう助言し、最終的には生徒自身に読む本を選ばせています」(勝見先生)

図書室は、各教科の探究的な活動で使う資料のよりどころにもなっている。同科目を通じて生徒の志向を把握している勝見先生と小澤先生は、生徒からの相談に、「前にこう書いていたよね。この本が探究につながるかも」と、生徒の関心に応じた助言をしている。

そのように、自分の関心に基づいて講読を重ね、レポートなどを書くことで、希望進路の分野で使われる用語が身につく。自分の考えを適切な語彙を用いて表現できるようになる。

「生徒は本科目の課題の添削を通じて、自分と他者の考えを混同しないことや、事実を要約してから自分の考えを書くことなどを習得します。3年次の志望理由書や小論文の作成時に、その成果が発揮されます」(加藤先生)

図2 読書感想文作成の指導概要

〈作成の進め方〉

- 1 本選び 司書教諭が用意した課題図書50タイトル以上の中から、生徒自身で読む本を選ぶ。
- 2 ワークシート 印象に残った場面(感動、共感、反感、疑問など)とその理由、主題と主題に対する自分の考えなどを書く。同シートが感想文の土台となる。
- 3 下書き 司書教諭によるワークシートの添削結果も踏まえて、「本の内容」「主題と自分の意見」「まとめ(自分はどうしたいか)」の3パートに分けて書く。

小澤先生「生徒は、何事に対しても『すごい』を使いがちで、自分の意見を他者に伝えるように表現するのが苦手です。添削では、例えば『すごい』をどういった意味で使っているのかなどを問いかけます」

- 4 清書 下書きの添削結果を踏まえて、800字以内で仕上げる。

〈学習評価〉

- 2~4 では、生徒はルーブリックを用いて自己評価を行う。教師も添削後に同じルーブリックを用いて評価をつけ、生徒に返却する。

勝見先生「形成的評価として、自分の力を認識できるようにしています。生徒には、『CならB、BならAと、1つでもよいから上を目指そう』と声をかけています」

●読書感想文のルーブリック(抜粋)

		A	B
文章	文章	主語・述語の不一致、文意が通らない文章がない	主語・述語の不一致、文意が通らない文章がある
	論理的な文章表現	論旨が一貫している(矛盾がない)	論旨が一貫していないところがある(矛盾がある)

※学校資料を基に編集部で作成。

図1 高校1年次「思考と表現」の主な学習内容

読書感想文	主題を意識してテキストを読む方法を学ぶ。読書感想文に書くべき内容と、その順序を考えることを通じて、論理的な文章展開について学ぶ。
進路を考える本	夏季休業中の進路学習の課題に向け、進路に関する新書を選ぶ。
ブックレポート	著者の考えを読み取り、自分の主張を確立した上でブックレポートを作成する。
SDGs 探究レポート	各自でSDGsに関するテーマを設定し、調べ学習を行う。根拠のある資料を基に結論を導き出し、レポートにまとめる(レポートの書き方の基礎を学ぶ)。グループディスカッションを通じて、個別の課題についての理解を深める。

ほかに、事典や新聞の縮刷版の使い方、インターネット検索の留意点などに関するスタディスキルを学び、その実践として、新聞の社説の要約を行う。定期考査はなく、提出物と授業に取り組む態度などで評価する。

※学校資料を基に編集部で作成。

注目

動いている図書室

同校の図書室は、年間約1,500冊を購入。廃棄できない書籍かどうかを慎重に検討し、蔵書を入れ替えている。全教師が担当教科の購入候補の書籍を検討し、購入の可否を決めている。「探究学習でこのテーマに取り組んでいる生徒がいる」「授業で使う」など、生徒の学びに合った書籍をそろえることを心がけている。

生徒の活動と進路を対話で結ぶ

教師が連携して生徒を把握し、対話につなげる

同校の生徒と教師の距離は近く、普段からよく話をする。その際に教師は生徒の関心を把握し、探究学習や志望校選択のきっかけとなる材料を提供する。また、図書室に保管されている「思考と表現」での成果物を見たり、生徒個々の貸し出し履歴から各教科や探究学習で活用した書籍を確認したりして、話の糸口を探ると、学力向上推進部の菅原孝宏先生は語る。

「担任は、各教科担当の教師との対話を通じてそれぞれの授業で生徒が示した関心を捉えて、どのような言葉を生徒にかければよいかを考えます。生徒の『マイ・ストーリー』づくりを中心に寄り添うのは担任ですが、担任が必要とする情報は、学校全体で連携を取って共有しています」

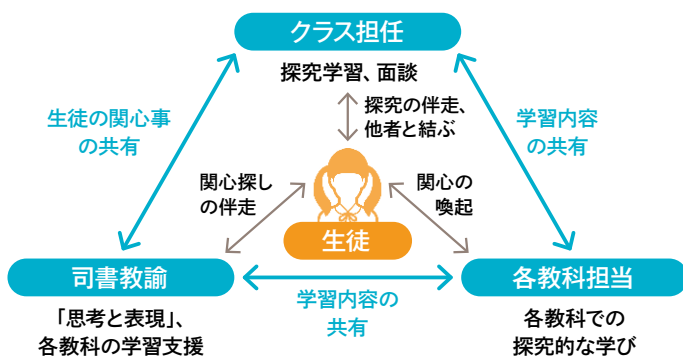
また、生徒との対話の前段階として、

信頼関係の構築も重視している。

「学問の本質を伝える授業をすることに加えて、面談ではじっくり生徒の話を聞きます。学校行事などで生徒の多様な面を捉えて褒めることも大切にしています」(菅原先生)

生徒を他者や社会と結び、志望校選択につなげることに力を入れていく。看護学部志望だったある生徒は、救急医療や高齢者看護など、大学ごとに特色があることを知り、志望校選択に悩んでいた。その生徒が子ども食堂

図3 「マイ・ストーリー」づくりの支援体制



※取材を基に編集部で作成。

展望

社会人の支援も得ながら探究学習を深化。教科指導も強化し、志望校の幅を広げたい

課外活動が中心だった探究学習は、22年度から、「総合的な探究の時間」で行っている。高校1年次は週2時間で、連携先の6つの企業の研究や、企業から出された課題に取り組み。高校2年次は週3時間で、人文科学・社会科学・自然科学・美術デザインの4つのゼミに分かれて探究学習を行う。専門的なテーマでは、外部の社会人の支援も得て、探究を深めていく。さらに、教科指導を強化して教科学力をより一層向上させ、国公立大学の総合型選抜・学校推薦型選抜の受験につなげたいと考えている。

「年内入試の受験者数の増加は喜ばしいことですが、一方で、丁寧な添削指導は時間を要するため、指導体制の構築も必要です。学校全体で支援する体制や方法を模索していきます」(田村校長)

の活動に取り組んでいたことから、田村校長が小児がんの子どもの支援ボランティアを紹介。生徒は、最終的に小児医療に力を入れる大学を選んだ。

「探究テーマが志望校選択に直結する生徒もいますが、多くの活動をしていても、自分の関心の軸を見いだせない生徒もいます。そうした生徒に必要なのは、他者の存在です。コンクールに出場して評価を受けたり、大学教員や地域の人など、学校外の人と話したりする中で、自分はこれからどうしたいのかを生徒はおのずと考えます。自分の内面を見つめ、自己との対

話を深めていく先に、自分が将来やりたいことが見えてくるのだと思います」(加藤先生)

3年次の志望校を絞り込む過程では、担任は入試日程を考慮しながら生徒個々に声をかけ、年内入試の準備を始める。

「その頃には『マイ・ストーリー』の軸はできているので、後はそれをいかに表現するかが重要になります。『思考と表現』で改善のためには添削が必要なことだと理解しているため、生徒はくじけず、何度でも志望理由書を書き直してきます」(加藤先生)